

## 実践報告書

広島県立広島皆実高等学校  
(教諭・山崎 恭子)**本実践のポイント（高校教育指導課指導主事 宮本洋子）**

本実践は、看護過程の思考過程や手順を理解するだけでなく、対象者を生活者として理解し、その人らしく生きることを支えるために、看護師はどのように思考し判断する必要があるのか気付かせるよう工夫された授業実践となっています。また、事例の活用や動画の視聴により、身体的・精神的な状況が具体的にイメージすることができ、グループワーク等の対話を通じて思考を深めることができるよう工夫がなされています。

## 1 はじめに

看護過程を看護援助において有効に活用するためには、看護過程の基礎となる考え方を理解しておく必要がある。急性期の看護過程において、退院後の生活を見据えた援助を行うための基礎的な知識を習得・活用する中で、対象者を生活者として捉える態度や思考を整理する力を身に付けることが求められている。

## 2 問題の所在

看護過程において、意欲はあるが苦手と感じている生徒が多い。そのため、少人数制の指導体制を取り入れ、生徒への必要に応じた個別指導や理解の確認等を行い進捗状況を確認しながら指導を行った。また、単なる思考過程や手順を理解するのではなく、対象者を生活者として理解し、その人らしく生きることを支えるために看護師はどのように思考し、判断するのかという看護実践能力を養うことを目指したい。

## 3 具体的な取組み

- (1) 事前に提示している事例患者Aさんの8日目の一場面の動画を視聴させた。
- (2) Aさんになぜこのような状況がおきたのかアセスメントし、看護上の問題点を、個人で考えワークシートに記入させた。
- (3) 看護上の問題点を解決すべく解決策を、事前に立案していた看護計画に追加・修正させた。
- (4) グループで情報を共有し、他者の意見を取り入れることで、自身の思考を深めさせた。
- (5) グループで共有・整理した内容について発表させ、学びを共有した。
- (6) 本日のまとめを看護過程とは、対象の変化に応じて看護計画の追加・修正を行う連続的なプロセスであり、この繰り返す連続的なプロセスが患者の看護上の問題解決につながっていくと説明し、事例Aさんの看護過程の記録で振り返らせた。

## 4 成果と課題

生徒の思考が深まるように、単元を通して継続した事例を使用し「その後」の場面を設定した。生徒は教員がロールプレイした動画を視聴することで、事例患者の身体的・精神的な状況のイメージが具体的にになり、既習の学習と結びつけながら患者の状態に応じた看護計画の追加・修正について思考することができた。授業後の学びとして、「指導時に理解できたように見受けていても、対象者が抱えるストレスや思いは常に変化するということを学んだ。」「日々の関わりの中で、対象者が思い表出しやすい働きかけは重要であると思った。」「看護計画は立案後も患者の状態を継続的に観察し、必要に応じて看護計画の見直しをする必要があることを学んだ。」と記述している。このことから対象者を生活者として理解し、その人らしく生きることを支えるために看護師としてどうすべきか思考することができたと考える。課題として、少人数制指導にてグループワーク時のファシリテーターとして教員を1名ずつ配置したことで、生徒の思考を深められる反面、生徒間での対話が少なく、生徒同士で思考を深め合うことが不足していた。さらに、病態やメカニズムについても思考させる発問が必要であった。今後はグループワークの進行は生徒が行い、生徒が主体的となり相互に考えを深められるような授業設計の工夫を行う必要があると考える。生徒自身がさらに考えを深め主体的に自律した学習を行うことで、看護実践能力の向上に繋がると考える。

## 5 おわりに

今回の授業を通して、看護過程における看護の本質について、対象の疾患や病態と同様に生活者としての社会的背景や精神面においても着目する必要性や、対象の状況は変化するため、継続的な観察と看護計画の修正が必要だという看護者として必要な視点や態度を養うことに繋がったと考える。今後も、看護の本質を捉え、指導方法や教材を工夫することで、主体的に学ぶ学習者の育成に繋がる授業づくりに取り組んでいきたい。